直接指示説の一つの帰結

――信念文におけるクリプキのパズルについて――

副島　猛

この論文では信念文におけるクリプキのパズルの紹介、ならびに検討を通じて、固有名などに関する直接指示説の一つの帰結を提示する。クリプキは‘A Puzzle about Belief’において固有名の置換には関係ないと思われる信念文のパズルを示し、フレーゲ的意味論の優位性を否定すると共に、常識的な信念の帰属法に疑問を投げかけた。だがここではそのような疑問を投げかける以前にとどまる。以下では信念の帰属などに関して常識的な見解にとどまり、直接指示説を認め、かつクリプキが示したようなパズルを回避しようとするならば、複数の世界を是認しなければならないことを示す。

1　クリプキのパズル

クリプキが論文‘A Puzzle about Belief’（Kripke）で取り扱っている三つのパズルを紹介する。クリプキのパズルとして有名なのは、三つのパズルの中のロンドンのパズルである。

パズルを示す前に、直接指示説と我々の日常の言語使用、ならびに日常での信念の帰属における諸原則を示しておく。

置換則（substitutivity）

或る文に含まれる固有名を、指示対象が同一な他の固有名と置換しても文全体の内容や真理値は変わらない。

置換則はクリプキの固有名に関する考え方からの自然な帰結であり、様相文脈においても通用する（Kripke,111）。固有名の働きは対象を指示することだけにあるのだから、同じ対象を指示する固有名はまったく等価である。ただし、確定記述に対しては

様相文脈においても、ここでの置換則に相当するものは通用しない（Kripke,105）。

翻訳則（principle of translation）

或る言語の文がその言語で真理を表現しているならば、その文のいかなる言語への翻訳も（翻訳された言語で）真理を表現している（Kripke, 115）。

以下のパズルで翻訳が関与する場合、この翻訳則の他に、使用する言語間の翻訳の実際的な規則が当然、関与している（Kripke, 127）。

（単純型の）引用符除去則（disquotational principle）

標準的な英語の話者が反省のうえ、誠実に 'p' に同意するならば、he believes that p である（Kripke, 112）。

この原則は、或る人の行動からその人に信念を帰属するという場面からの一つの抽象である。当然、我々は他の仕方でも信念を帰属しているが、ここでは単純化のためにこの原則だけを用いる。この原則自体は、日常の言語使用に適合しているように思われる。

ところで単純型の引用符除去則からだけでは 'he does not believe that p' のような非信念の帰属をすることができない。非信念を帰属するためには、相互条件型の強い引用符除去則（無口ではない標準的な英語の話者が、'p' に対して反省のうえ、誠実に同意する傾向をもつのは、he beleives that p であるときそのときのみに限る）を前提する（Kripke, 113）。あるいは「最小限の論理（あからさまに p と ¬p を同時に信じない）」を前提すると（Kripke,114)、単純型の引用符除去則からでも非信念を帰属できる（'¬p' に同意 ⇒ he believes that ¬p ⇒ he does not believe p）。いずれかの方法で非信念を帰属できるようになると、以下のパズルで信念の遂行者があからさまに矛盾することを信じていることが導かれるばかりか、信念の報告者（我々）も矛盾した判断をしていることが導かれる。

キケロのパズル（Kripke, 115, et al.）

信念文において文全体の真理値を変えずに、そこに含まれる固有名をそれと同一な対象を指示する別の固有名で置き換えることができないように思われる場合がある。

例えばジョーンズが 'Cicero was bald' に同意したとすると、引用符除去則より、

(1) Jones believes that Cicero was bald.
が導かれる。

それと共にジョーンズが 'Tully was not bald' にも同意したとすると、やはり引用符除去則より、

(2) Jones believes that Tully was not bald.
が導かれる。

ここで 'Cicero' と 'Tully' は同一人物を指示しているので、仮に置換則が正しいものとしてそれを (2) に適用してみると、

(3) Jones believes that Cicero was not bald.
が導かれる。

ここでジョーンズが「最小限の論理」を備えているとすると (3) より、

(4) Jones does not believe that Cicero was bald.
が導かれる。

さて、ジョーンズはキケロが禿頭であることを信じているのだろうか、いないのであろうか？

クリプキの考えでは、このようなパズルの原因は置換則にあるとは限らない。従来、このパズルの原因は置換則を無条件に認めていることにあると考えられてきた。そして、このような置換が無条件に認められないことを説明できるフレーゲ的意味論が有利であると考えられてきた。ところがこのパズルでは引用符除去則と置換則の両方が用いられているのであるから、パズルが生じたからといって一方的に置換則が誤りだということにはならない。従って、このパズルは特にフレーゲ的意味論を有利にするものではない。

ロンドンのパズル (Kripke, 119)

置換則がパズルに関係ないことを積極的に示すためには、置換則を用いなくとも同種のパズルが生ずることを示せばよい。このロンドンのパズルでは、置換則を用いなくとも、キケロのパズルと同様なパズルが生じている。

フランスに居住し、フランス語以外の言語を話さない標準的なフランス語の話者ピエールが、ロンドンについて伝え聞くところから 'Londres est jolie' に同意したとすると、引用符除去則と翻訳則より、

(4) Pierre believes that London is pretty.
が導かれる。

その後、ピエールはどういうわけかロンドンの美しからぬ一郭に住むことになり、無教養な隣人たちと同じくロンドンの他の地域へ行くことはほとんどない。ピエールはロンドンで翻訳に頼らずに直接的な方法で英語を学習した後に'London is not pretty'に同意したとすると、引用符除去則より、

(5) Pierre believes that London is not pretty.
が導かれる。

ここではキケロのパズルと違って二つの同意の間に時間の経過があるので、次の四つの選択肢が与えられるように思われるが、いずれも満足できるものではない。

(a) ピエールがロンドンに住む今となっては、かつての'Londres est jolie'に対する同意を無視する。
(b) 現在の'London is not pretty'に対する同意を無視する。
(c) 両者の同意を共に無視する。
(d) 両者の同意を共に尊重する。

普通には(d)を選ぶのが妥当であろうが、そうするとキケロのパズルと同様の結果になる。

このパズルでは置換則は用いられない。従って、このパズルの原因は置換則には無いことになる。

またクリプキによれば、フレーゲの意味論はこのパズルを解決することができない。なんらかの状況の記述はできるかもしれないが、ピエールはロンドンが美しいと信じているのか、いないのか？という問に結局は答えられない(Kripke, 124)。

ところでこのパズルには翻訳則のみならず、翻訳の実際的な規則が関与している。このパズルは固有名の翻訳が不適切であるから生じたのかもしれない。だがここで行なわれている翻訳(Londres → London)が特に不適切であるとは考えられない(Kripke, 130)。

パデレフスキーのパズル(Kripke, 130)

ここでは翻訳則や翻訳(翻訳の実際的な規則)を用いずに、引用符除去則だけからでもこれまでと同様なパズルが生ずることが示される(ただしこれまでとは違って、

或る意味において多義的な固有名が使用される）。これによって、翻訳がこの種のパズルに無関係であることがわかる。

ピーターはパデレフスキーという名前をある有名なピアニストの名前として知った。そこでピーターが 'Paderewski had musical talent' に同意したとすると、引用符除去則より、

(6) Peter believes that Paderewski had musical talent.

が導かれる。

その後、ピーターはパデレフスキーという名前を或る有名な政治家の名前として知った（もちろんこのパデレフスキーはさきほどのパデレフスキーと同一人物である）。ピーターは政治家が音楽の才能をもっているものとは思っていなかったので、'Paderewski had no musical talent' に同意した。そこで引用符除去則より、

(7) Peter believes that Paderewski had no musical talent.

が導かれる。

あとはこれまでのパズルと同様である。これによって引用符除去則のみが関与するパズルが示された。

2 クリプキのパズルへの対処

クリプキはいずれのパズルも同種であると考え、パデレフスキーのパズルのような固有名の置換や翻訳に関係のないパズルが存在することからして、この種のパズルの根本的な原因は、置換則や翻訳則や翻訳の実際的な規則の欠陥ではないと考えた。この段階で置換則の是非を問うことは無意味ですらある（Kripke, 135, note-43）。

そこで残るのは引用符除去則である。クリプキは信念の帰属の仕方に問題があることを指摘している（Kripke, 136, et al.）。だが特にそれ以上の詳細な検討はしていない。

それでは引用符除去則による信念の帰属がどのようなわけで誤っているのだろうか。ここで、ソームズの命題に対する態度（propositional attitude）と文に対する態度（sentential attitude）の区別を持ち出してみるとよいかもしれない（Soames, 219）。引用符除去則はある文に対する同意をもとに信念を帰属するのであるから、引用符除去則を用いた帰結は命題に対する態度を報告しているのではなく、単に文に対する態

を報告しているに過ぎないということになるのかもしれない。

しかしこれは引用符除去則に対する決定的な批判にはならない。というのも、そもそも信念文をはじめとする態度文は、命題的態度（propositional attitude）とも呼ばれるにもかかわらず、本当の意味で命題に対する態度を表現しているものであるとは限らないからである。態度文は文に対する態度を表現しているものであると唱える論者すらいる（Richard）。

態度文は本当に命題に対する態度を報告しているものだろうか？、そしてそもそも命題とは何なのだろうか？、といったことをここで検討することはしないが、一方的に引用符除去則が誤っているとするのは、我々の日常の言語使用からしても早計であるように思われる。以下ではとりあえず引用符除去則が正しいものとして検討を続けていく。

3　三つのパズルの検討

ここでは三つのパズル（キケロのパズル、ロンドンのパズル、パデレフスキーのパズル）がクリプキが言うように同種で、本質的に同じものであるといえるかどうかを検討する。

各種の原則を用いたそれぞれのパズルの帰結が見かけのうえで同じものである、ということは明白であろう。すべてのパズルで信念の遂行者はある文と正にその文の否定文の内容を信じていることが帰結される。

次に、信念文に埋め込まれた文（従属節、補文）に含まれる固有名やその固有名によって指示される対象についてはどうだろうか。

すべてのパズルの信念文の補文では一つの対象だけが指示されている。キケロのパズルでは過去に存在した歴史上の一人の人物が指示されている。ロンドンのパズルではイギリスの首都である一つの都市が指示されている。パデレフスキーのパズルではショパン全集の校訂者として有名なピアニストであり、ポーランド民族主義者たちのリーダーで首相にもなった或る一人の人物が指示されている。

それでは他方、このような指示をおこなう固有名の方はどうだろうか。信念の遂行者が使用している固有名の数について見てみよう。キケロのパズルでは信念の遂行者は‘Cicero’と‘Tully’という二つの固有名を使用している。ロンドンのパズルの場合

に信念の遂行者は 'Londres' と 'London' という二つの固有名を使用している。パデレフスキーのパズルの場合には 'Paderewski' という一つの固有名を使用している。これらは同種の事柄といえるだろうか。あるいは、これらを同種の事柄と言うためにはどのように考えたらよいだろうか。

ここで言いたいのは、それぞれのパズルで信念文の補文に含まれる固有名の見かけの数は事柄とは関係ない、ということである。どの場合でも事態は本質的に同じでかつ、固有名は一つ、あるいは二つでありうる。

キケロのパズルでは二つの固有名が用いられているが、ジョーンズが用いる 'Tully' がたまたま 'Cicero' であって（その場合に 'Cicero' はパデレフスキーのパズルと同様に多義的になる）、かつ両者の指示対象が同一視されていないことがありうる。このような事態は元の事態と本質的に同じであり、かつ固有名が一つである。

ロンドンのパズルではロンドンを指示する二つの固有名が用いられているが、フランス語でロンドンの固有名が 'Londres' であり（cf. Sosmes, 213）、かつ英語での 'London' とフランス語での 'Londres' の指示対象が同一視されていないことがありうる。このような事態ももとの事態と本質的に同じであり、かつ固有名が一つである。

パデレフスキーのパズルでは一つの固有名だけが用いられているが、この場合には 'Paderewski' は多義的であり、ピーターは同一の固有名をコンテクストによって使い分け、別の二つの対象を指示しているかのようである。従ってピーターが無用な混乱を解除するために例えば、'Paderewski A' と 'Paderewski B' と言う二つの固有名を使用するようになることもありうる。このような事態はもとの事態と本質的に同じであり、かつ固有名が二つである。

以上のような考察により、確かに三つのパズルは同種で、本質的に同じものであると言ってよいように思われる。そして、これらのパズルをパデレフスキーのパズルが代表しているとも考えられるので、この種のパズルは固有名の置換や翻訳に関係なく生ずるといえるであろう。それではパズルの原因はどこにあり、どのようにすればパズルを回避することができるだろうか（回避する必要があるならば）。

解決へのヒントは次のことにあるように思われる。クリプキはロンドンのパズルをフレーゲの意味論で解決することができないことを示すために、'London' と 'Londres' が同じ記述をもっていたとしてもパズルが生ずることを述べている（Kripke,125）。その議論で重要な点は、ピエールはたとえ 'London' と

'Londres'に同じ記述を当てはめていたとしても両者の指示対象を同一視せず、別のものとみなしている場合がある、と言うことである。このような記述は先ほどのここでの議論にもしばしばあらわれており、これらはまったく事実に即しているように思われる。これらの記述は何を示唆しているのだろうか。

実際にはロンドンという都市は一つしかない。だがロンドンのパズルにおけるピエールにとって、対象となる都市は二つ存在するかのようである。ところがその二つの対象とはいったい何だろうか。それらはいわゆる観念やフレーゲ的意味論での意味（Sinn）なのだろうか。あるいはそうではないとすると、それらはどのような仕方で存在するのだろうか。とりあえずはこれまでに見てきた全てのパズルにおいて信念の遂行者の立場からすれば、彼らは二つの異なる対象を指示しているように思われるし、そのこと自体は間違いないように思われる。

4　パズルの原因と解決案

置換則、翻訳則、翻訳の実際的な規則、引用符除去則といった個々の原則が正しくないとする考えも当然あってもよいだろう。しかしパデレフスキーのパズルのようなケースが存在する以上、この種のパズルの原因は引用符除去則か、あるいはこれまでに明示されていない原則によるものであると考えざるを得ない。その上、ここでは引用符除去則もとりあえずは正しいものと見なしている。

三つのパズルの同種性を検討した際に注目すべきことは、実際には指示されている対象は一つしかないのに、信念の遂行者は二つの対象を指示しているかのように振舞っているということである。

ここでこの「二つの対象を指示しているかのように振舞っている」を「実際に二つの対象を指示している」という様に捉えなおすことができないだろうか。これが文と指示される対象世界での事態以外の第三のメディエーターを用いないような単純な素朴理論に留まったままで、パズルを解消するための指針である。このような指針に基づいてパズルの解消するために、次の（A）と（B）のテーゼを認めることにしよう。

（A）固有名であってもその指示対象がコンテクストに左右される場合がある。

これは日常言語では当然、認められてもよいものである。多くの同音異議の固有名

が日常言語には存在するが、それらはコンテクストによって見事に使い分けられている。なお、パデレフスキーのパズルにおける 'Paderewski' は多義的ではあるが、この（A）のテーゼからだけでは二つの対象を指示する機能を持つ、という意味で多義的であるとは言えない。'Paderewski' は一人の人物だけを指示していたはずである。そこで次の（B）のテーゼが必要になる。

（B）言語のモデル（世界）は一つであるとは限らない。信念の遂行者と報告者で異なる場合もありうる。

三つのパズルにおいて信念の遂行者が二つの異なる対象を指示しているかのようであり、実際に指示しているということからすれば、信念の遂行者の世界には二つの対象があり、信念の報告者の世界にはその両者を同一とみなした一つの対象のみがある、と考えるのが適切であるように思われる。このようなテーゼをひとたび認めると、一般には存在しないとされるものも或る人にとっては存在するものとして認めなければならないようになり、ひいては指示の因果説との不調和をもたらすかもしれない。しかしここで取り扱っているパズルに限って言えば、存在しない対象が指示されているケースは一つとしてないので、とりあえずはそのような問題を避けて通ることができる。

一般的に言って、言語のモデル（世界）は変化することが可能で、実際に変化してきたのではないだろうか。日常言語が指示するものとして存在を前提している世界は、必ずしも真なる実在世界ではないかもしれない（そういうものが存在したとして）。しかもまさに真なる世界を探求している人達が用いている言語においても、新たな発見によって言語の指示する世界に変化がもたらされているのではないだろうか（クリプキの *Naming and Necessity* での議論（N&N, 85, notes-36）に示唆をうけたが、クリプキ自身がこのようなことを言っているわけでは決してない）。

結局、パズルは固有名の指示がコンテクストによって変化することを無視して、さらに信念の報告者の言語のモデル（世界）だけしか考慮していなかったから生じたと考えられる。もしこれらを考慮に入れるならば、それぞれのパズルにおける信念の遂行者は異なる対象に関して肯定的な、あるいは否定的な事態を信じているのであるから、矛盾した信念を持つことにはならない。そしてこのような事態を、信念の遂行者のモデルとは異なる信念の報告者のモデルで解釈しない限り、信念の報告者が矛盾し

た判断をしてしまうこともないのである。

さらにここに到って、置換則や翻訳則が無条件に認められないこともわかる。というのも、固有名とその指示対象の対応関係が信念の遂行者と信念の報告者では異なっているかも知れないからである。従って、キケロのパズルとロンドンのパズルの直接的な原因は置換則や翻訳則にあるのであるが、その根本的な原因はパデレフスキーのパズルとおなじであることには変わりがない。クリプキは置換則や翻訳則に無関係な場合でもそれらを使用したときに生じたパズルと同種のパズルが生ずることから、この種のパズルの原因は置換則や翻訳則ではないと推論した。だがこのような消去法的な推論には落し穴があったのである。

5　素朴ではない信念の取り扱いについて

信念文の取り扱い方には、信念文は信念の遂行者と或る文の信念関係を報告したものであるとする素朴なもの（これまでのクリプキの取り扱い方はそうであろう）の他に、遂行者と文以外に第三のメディエーター（或ることが信じられる仕方に相当するもの）を認めたものもあり、むしろこちらの方が主流である。例えば、ソームズは文と対象世界での事態の他に構造化されたラッセル命題を措定して、信念文などの態度文は信念の遂行者と信念文の補文のラッセル命題との関係を報告するものであるとした（Soames）。

確かにこのような素朴ではない意味論は、固有名などに関する直接指示説を認めることに由来する或る種の困難を取り除くことができる。例えば、ソームズの意味論では次の例で（8b）から（8c）が導かれることは妨げられる（Soames, 207, 226）。

（8a）古代人は、「宵の明星」が宵の明星を指示し、「明けの明星」が明けの明星を指示する、ということを信じていた。

（8b）古代人は、「宵の明星」が宵の明星を指示し、「明けの明星」が宵の明星を指示する、ということを信じていた。

（8c）古代人は、「宵の明星」が宵の明星を指示し、「明けの明星」が宵の明星を指示し、或る x が存在して「宵の明星」が x を指示してかつ「明けの明星」が x を指示する、ということを信じていた。

（8d）古代人は、或る x が存在して「宵の明星」が x を指示してかつ「明けの明星」

がxを指示する、ということを信じていた。

ところが固有名に関する置換が無条件に認められているために、(8a) から (8b) が導かれることは妨げられず、容認されている。これはキケロのパズルにおいて、置換則によって (2) から (3) が導かれるのと同じことである。このような我々の日常の言語直観に反することが、そのままの形で是認されてもよいものだろうか。

そこで意味論の範囲を越えて語用論を援用することによってパズルを解決することが試みられる (cf. Crimmins, 3)。例えばキケロのパズルにおいて、(2) が真であれば (3) が真であることは認めざるを得ないが、(3) によってジョーンズの信念を報告するのは不適切である、と考えるのである。

しかし問題はすでに意味論の範囲内にあるのではないだろうか。端的に言えば (2) が真であっても (3) が真であるとは限らず偽でもありうる、というのが我々の言語直観である。クリプキがロンドンのパズルにおいてフレーゲ的な意味論に対して投げかけた、ピエールはロンドン (しかじかの記述を充たす都市ではなく、ロンドン) が美しいことを信じているのかいないのか? という問い (Kripke, 124) に答えられないのはフレーゲ的な意味論ばかりではなく、ソームズのような素朴ではないが直接指示説を認めている意味論もそうなのである。

文献

Crimmins : Mark Crimmins, *Talk About Beliefs* (MIT Press, 1992).

Kripke : Saul Kripke, 'A Puzzle about Belief', in *Propositions and Attitudes*, ed. by N. Salmon & S. Soames, 102-148 (Oxrford University Press, 1988, originaly in *Meaning and Use*, ed. by A. Margalit (1979), 239-283).

N&N : Saul Kripke, *Naming and Necessity* (Basil Blackwell, 1972, 1980).

Richard : Mark Richard, Propositional Attitudes (Cambridge University Press, 1990).

Soames : Scott Soames, 'Direct Reference, Propositional Attitudes, and Semantic Content', in *Propositions and Attitudes*, ed. by N. Salmon and S. Soames, 197-239 (Oxrford University Press, 1988, originaly in *Philosophical Topics*, 15 (1987), 47-87).

〔哲学　研修員〕

A Consequence of Direct Reference Theory

——concerning Kripke's Puzzle about belief——

Takeshi SOEJIMA

In this paper the author presents a consequence of direct reference theory through a careful examination of Kripke's Puzzle about belief.

Kripke presented, in 'A Puzzle about Belief', a puzzle about belief which has no relation with a substitution of proper names. In doing that, he rejected a superiority of Fregean semantics, and suggested us a reconsideration of belief attribution.

But the author dares to accept usual attribution of belief for a practical reason, and on this assumption tries to resolve the puzzle. A consequence is the following. If we accept usual attribution of belief, accept direct reference theory of proper names, and want to resolve the puzzle, then we must also accept a multiplicity of worlds, that is, a multiplicity of models of our language. Additionally, the author points out that Kripke's way of thinking that concludes innocence of a substitution of proper names is incorrect.